

ウスキキヌガサタケの匂い

吹春 公子

このたびウスキキヌガサタケの成長を観察するという大変貴重な機会を得ることになった。ウスキキヌガサタケ *Phallus luteus* (Liou & L. Hwang) T. Kasuya は中国、日本、韓国、インド、メキシコに分布し、日本ではとくに滋賀県以西の本州・四国・九州に発生する環境省絶滅危惧種Ⅱ種に指定されている珍菌である。千葉県での記録はない。今回、愛媛県今治市の小川尚志さんのご好意により、2008年9月19日に今治市玉川町の鈍川溪谷で採集したウスキキヌガサタケの菌蕾を発送していただいた。

独特の残り香とレースの鮮やかな黄色が印象深い

9月22日14:30前到着。スチロール箱を開けたとたん、目が刺激された。まるで浦島太郎の玉手箱のごとく立ち上る臭いはアンモニアと甘いムスクのような香りが合わさっているよう。この属に多いいわゆる排泄物臭ではない。樹脂臭のようにも感じられるスースーともツーンともいえる息を吐いた後鼻に残る独特の残り香はキヌガサタケともアカダマキヌガサタケともスッポンタケとも別もの。臭いとともにはレースの黄色の鮮やかなこと。ウスキ（薄黄）どころか濃い卵黄のような山吹色、まるで長崎名物鶏卵素麺。平たくしっとりして張りがあるものの、ちょっとガサガサした手触り。傘に入る部分のみ白く、入り込んだ先端部までも穴が開いている。托にはしっかりと薄膜が見える。初めてみるウスキキヌガサタケはとにかく強烈な印象であった。揺られてきたためにおそらく傷がつき、また



写真1 21:56 レースは最初から黄色だが、このときにはまだ匂いを感じなかった



写真2 00:57 圧縮してあるレースを広げる様はまるで生き物。左側にもうひとつの菌蕾がみえる

発泡スチロール箱によって温度や湿度が保たれていたせいもあってか、2本はすでに発生して成菌となっており、それらをそっと取り出すと、白くて少し赤味がかかった菌蕾が2つでてきた。合計4個体。その菌蕾を私が預かって発生させることとなった。

温度・湿度を調節し成長を促す

箱には現地の土が約半分入っていたので、そのまま天地を確認して植え付け、家の中で一番湿度の高い風呂場に置いた。約1日経っても動く様子をみせないで、地(土)温が上がるよう焚いた風呂のふたの上に置き、気温25℃以上湿度80%以上をできるだけ保ちながら放置してみた。温度と湿度はとくに根拠があるというわけではないが、植物の種子が容易に発芽できる気温を参考に、またキヌガサタケとは雨の中出会うことが多かったために湿度を高めてみようくらいの、なんとなくそうしたほうがよさそうな気がしたからである。

レース部分からの独特の香りを認める

9月23日21:55、夜だというのにひとつの菌蕾が動き始めていた。すでに1時間ほどは経っているだろうか、グレバをつけた傘の下にギュッと圧縮された山吹色のレースがみえる(写真1)。約1時間後、傾いた托の背の部分からレースは伸び始めた(写真2)。しかし、托は伸長しきっているわけではなく、伸長しながらゆっくりとレースを伸ばしていった。まるで蝶の羽化をみているようである。温度が下がると伸長スピードが落ちるようなので、たびたび風呂を焚きながら環境を維持した。部分的に開かない部分があったので水を垂らしてみたところ、からんだ糸を解くようにひろがった。しかし部分的に水を含んでも寒天のようににはならなかった。地面まで届く長い裾、キヌガサタケよりも肩が張った姿。グレバは朽葉色で成熟にしたがって暗緑色となり

あまり臭わず、傘はクリーム色がかかった黄色。しかし、ここであることに気付いた。ときどきレースに触れて張りを確かめていたのだが、なんとレースが臭うのである。臭うというよりも匂うといったほうがいいのかもしいない。触った手をふと顔に近づけたところ香がする。抹香とも沈香とも甘いアンモニアともムスク



写真3 03:31 ほぼ全開、斜め上から。肩のいかりがよくわかる



写真4 07:31 外皮、ゼリー、内皮の三重構造のつぼからのぞくグレバをつけた傘



写真5 09:20 2本目も背側からレースを伸ばし始めた。
托には薄膜がみえる



写真6 14:19 全開したところ

ともいうような匂い。先日到着したときにはグレバの匂いと思っていたが、グレバが流れてレースが匂っているのではなく、明らかにグレバとは別の匂いが存在する。黄色く色づいた部分が匂っている。これはちょっとした発見であった。ほんの一部を残してレースが開ききったのは03:30 ごろ、伸長してから約6時間半(写真3)。この後も朝まで温湿度を保ったところ、若干力をなくしたものの半日はしっかりとレースを開いていた。

もうひとつの菌蕾が動き出し、レース部分からの同様の匂いを確認

翌日 07:00 ごろ、もうひとつの菌蕾が動き出した(写真4)。09:10 托の伸長がおおかた止まった後、やはり傾いた背からレースを開き始めた(写真5)。先のものと同様にレース部分が匂いを放っている。開いてから匂うようだ。発生から約7時間15分経った14:15 過ぎレースは伸びきり(写真6)、その張りは一番先に伸び始めた背の裾の部分から徐々に力を失いつつも19:30 ごろまで続いた。

今回の観察でレース部分が匂いを発するということを認識することができたのは驚きであった。またグレバ部分についても凶鑑にあるような排泄物の悪臭ではないことを知ることができた。ただ、匂いについては個人差があるため、快いと感じるか不快と感じるかは様々なのでなんともいえないが、少なくとも私にはよい匂いと感じた。将来野外でウスキキヌガサタケを観察できることを願いつつ、末筆ながらこのような機会を与えていただいた小川尚志さんに深く感謝いたします。なお標本は千葉県立中央博物館にて保存いたしました(CBM-FB-37342)。

参考文献

Taiga Kasuya. 2008. *Phallus luteus* comb. nov., a new taxonomic treatment of a tropical phalloid fungus. Mycotaxon 106 : 7 - 13.